



一般社団法人

ဂျပန်-မြန်မာ့အသင်းကြီး

日本ミャンマー友好協会報

第172号

令和5年8月発行

発行人：藤村建夫
編集人：中田大生

一般社団法人 日本ミャンマー友好協会 E-mail ●tzkosm@abelia.ocn.ne.jp http://jmfa-main.com/

●本 部 〒160-0012 東京都新宿区南元町13-3-504 TEL.03-6380-0409

●広報部 〒243-0017 神奈川県厚木市栄町1-2-2-322 FAX.046-224-3011



変貌するヤンゴンの街並み (撮影：藤村 建夫)

収録内容

混乱するミャンマーの教育現場を憂う …… 2	米村前会長お別れの会開催 …… 9
総会報告 …… 3	ミャンマー国鉄OB会に参加して ……10~11
新入会員のご紹介 …… 3	活躍する在日ミャンマー人のご紹介 ……12
会費納入のお願い …… 3	千野皓司元会長ご逝去 ……13
ミャンマー映画鑑賞会を開催する …… 4	<哀悼> 松尾理事ご逝去 ……13
楽しかったさくらんぼ狩りへのバスツアー …… 5	お釈迦さまの物語 (第八講) ……14~15
ミャンマーエンジニアとしての来日 ……6~7	協賛企業 ……16
さてどうなることやら奮闘記 ……8~9	編集後記「ヤダナー」 ……16



路上の古本屋さん

本部HP▶





巻頭言



混乱するミャンマーの 教育現場を憂う

一般社団法人 日本ミャンマー友好協会
会長代行 藤村 建夫

ハイレベルにあったミャンマーの 戦前からの教育と人造り

「シンガポールのリークアンユー元大統領は、第二次大戦中、ラングーン大学への入学がかなわなかったので、イギリスのケンブリッジ大学に入学した」とミャンマー人の友人が誇らしげに語るのを聞いたことがある。因みにラングーン大学は、前身のラングーン・カレッジが1878年に設立され、1920年にパプテリスト系のジャドソン・カレッジと合併して設立されたもので、145年の歴史を持つ国立大学である。

1980年代、JICA事務所長を務めた筆者のパートナーであった各省庁の高官は、いろいろな制約の下で、最善の努力をしており、皆好奇心にあふれ、とても優秀な人達だった。例えば、1985年に日本の技術・無償資金協力によって開通した長さ300mのツワナ橋は、ミャンマーで建設された最初の長大橋だった。ミャンマー人技術者は、設計・建設技術を講義とOJTを通じて習得した。その後、ミャンマー人技術者は、この知識と経験により、2013年までの28年間に4つの大河に、自力で28の長大橋を建設した。(資材は中国製の模様) 彼らの力量には、大いに驚かされたことである。

改革半ばで崩壊している教育現場

1962年以降の社会主義時代の鎖国政策と1988年の騒乱以降、軍事政権による大学の閉鎖や地方への分散によって、高等教育は苦難の道を歩み、急速なレベルダウンを余儀なく

されてきた。

2011年、国軍出身のテインセイン政権は、民主化路線に舵を切り、諸外国との交流を自由化した。国際水準の教育を追求すべく、国家教育法の制定、学制改革、基礎教育の地方分権化等の急速な教育制度改革を進めてきた。

JICAの協力を得て、2014年に開始された国際標準の12年制(小学5、中学4、高校3)の学制に則したカリキュラムや教科書の改訂実施の改革路線を、スーチー政権も引き継ぎ、進めてきた。

しかしながら、2021年2月のクーデターは、これらの教育改革の努力を一夜にして断絶、崩壊させてしまった。政治的混乱、教員の不服従運動(CDM)と治安の悪化によって、殆どの学校が閉鎖された。軍事政権は11月に大学から小学校までを再開したものの、教官、教師の復職は遅々として進まず、2022年末でも、50%程度のようなのだ。生徒の登校復帰も30%程度と言われている。公立学校に行かない生徒の多くは、NUGの学校や僧院の学校、私立学校、私塾に通っているのだという。

大学の入学試験と高校の卒業試験を兼ねたセーダン試験は、重要な国家試験である。2019年には99万人が受験したが、2022年には18万人に激減したようだ。他方、NUGも独自のセーダン試験を今年の3月に実施したという。どちらの試験を受験すべきか受験生の困惑が目に見えるようである。

泥沼化する国軍と民主派の戦い

2023年5月公表の米国シンクタンクの分析によれば、民主派との戦闘で、国軍は兵士13,000人が戦死、8,000人が脱走し、計21,000人を失ったという。更に士官学校の希望者が激減して、将校を育てることが難しくなっているとも聞く。他方、民主派は少数民族の武装勢力を通じて自動小銃を入手して武力を強化したり、ドローンを使って国軍部隊の拠点を急襲したりしているようだ。両者が和解する道のりは、未だ霧中にあり、まったく先が見えない。

海外志向のミャンマー青年の

未来への希望を支えたい

このような最近の絶望的な国内事情に見切りをつけて、海外、就中、日本で働きたいミャンマー青年が増大している。2022年度の日本語能力テストには10万人が受験したという。これらの青年の中には、両親がCDMによって、給与所得を失い、困窮している家庭の人達も多く含まれている。

当協会は2022年度に「日本ミャンマー交流基金」を設置して、ミャンマーの人々との「文化交流」「人材交流」「経済交流」を促進している。上記のようなミャンマー青年の経済的負担を少しでも減らし、未来に希望を持てるよう、奨学金の支給を検討している。このための「日本ミャンマー交流基金」に、市民の皆さまからの浄財のご寄附を一層強く募りたい。



令和5年度総会報告

専務理事 **都築 治**

令和5年6月25日(日)14時～15時、新宿区市ヶ谷JICA地球ひろばで令和5年度の総会を行った。議決権のある会員51名の内、委任状16名、出席者19名(内ズーム出席3名)計35名で総会成立。

藤村会長代行の挨拶に続き、議長選出、議事録署名人選出があり議事が進行した。

事業報告では、総会、理事会(2回)、会報発行(7月、2月)、ホームページ刷新、広報委員会開催、企画委員会等の説明があり、続いて各交流部会からの報告があった。

会計報告は期末残高現金7,023円、預金1,136,204円、負債なし。

当期収入1,459,945円、支出844,718円、収支差額615,091円、次期繰越金1,143,227円、なお年度途中で「日本ミャンマー交流基金」が発足したため、連結決算としたとの報告があった。

事業計画案では、総会、理事会、会報発行を原案通り行うと共に、ホームページとフェイスブックを充実させ両立を図る。映画会開催、日緬青年交流会、多文化丸ごと講座開催、困窮している留学生支援活動、富士PS社ミャンマー社員との交流、経済セミナー開催、ミャンマーでの奨学金制度開設等々、交流部会から多くの計画案があり承認された。つづいて予算案の説明があり、今年度は会計を明瞭にするため総務関係の予算、日本ミャンマー交流基金の予算を別建てにすることで承認された。

令和5年度と6年度の役員は、次のように決まった。

令和5年度役員名簿

会長代行	藤村建夫
副会長	高松重信、大澤清二
専務理事	都築 治
常務理事	山下賢一、新美鉄雄
理事	三宅紘一、田中 進、古川健士、イイキン、キンチー、伊藤秀以智、角谷猛志、三井 優、星山尚淳、キンテツモン、岡 晃市、田邊直樹、中田大生、土井美々れ
監事	柴崎等、渡邊奉勝
顧問	山口洋一、高橋秀夫
相談役	安城欽寿、池田正隆
参与	湯ノ口俊市郎、浅野静二



受付：鳥羽紀子さん、キンチーさん



会場の様子

新入会員のご紹介

■カインミョウタン様

男性／大阪府大阪市／会社員
会員区分：ミャンマー会員

■土井 美々れ様

女性／大阪府大阪市／(株)ミャンマーサポート 代表取締役
会員区分：一般会員

■前出 博幸様

男性／滋賀県近江八幡市／前出産業(株) 代表取締役
会員区分：一般会員

■メイニョウ様

女性／ミャンマーヤンゴン／(有)ピーススマイルランド 代表取締役
会員区分：ミャンマー会員

■宮本ナンシャエーイン様

女性／滋賀県野洲市／ミャンマー料理家・主婦
会員区分：ミャンマー会員

■勝喜株式会社様

男性／愛知県稲沢市／代表取締役・龍田 甚右衛門
会員区分：法人会員

■ティンザーラツ様

女性／静岡県静岡市／ミャンマー一人対象にオンライン日本語教室を主宰
会員区分：一般会員

会費納入のお願い

当協会も新体制のもと、順調に運営を始めています。会費未納の方は下記新規口座に納入をお願いいたします。

<年会費> 個人 10,000円
学生 3,000円
法人 50,000円

<振込先>
三菱UFJ銀行 新宿新都心支店 普通0376654 日本ミャンマー友好協会 都築治
会員増強をいたしております。お知り合いにミャンマーに興味のある方ございましたらご勧誘ください。



ミャンマー映画鑑賞会を開催する

当協会理事 三井 優

私は2006年に初めてミャンマー連邦共和国に行きました。私の友人が経営するホテルに滞在し、その時、ホテルでミャンマーの映画人として活躍されているプロデューサーと知り合いました。彼曰く、「ミャンマーの映画はミャンマー人しか観ない」と。外国人をまったく意識していないということですね。これは非常に珍しい考え方で映画を製作する側の人間が、自国の人間にしか作った映画を見せないというミャンマー映画界にはそんな習慣があるのです。この考えは訂正するべきだと思いました。

しかし考えてみれば日本も同じことが言えるのです。日本の戦後から日本映画が衰退するまで、日本人は海外を意識することなく映画を作り続けて来ました。もちろん例外的な日本映画もいくつかあります。黒澤明や小津安二郎などです。しかし大半は日本人のみを相手として日本映画は作られて来ました。そこに日本とミャンマーの共通項のようなものを感じ、ミャンマー人しか観ないミャンマー映画を日本で上映してみたいと考えました。そして2007年に第1回ミャンマー映画祭を横浜の関内、中区の区役所隣接のザイムホールで開催しました。宣伝費もまったくかけないにも関わらず、ミャンマー映画祭当日は朝日新聞社の取材や客席は満員となり驚きました。日本人はミャンマー、かつての戦前から続くビルマを覚えていたのです。

第2回ミャンマー映画祭を東京の銀座ビクタービル地下ホールで開催しました。以後、続けて数年ごとに都内、渋谷アップリンクやその他で開催。早

稲田大学、上智大学、東京外国語大学など各大学や地方の自治体などの要請でミャンマー映画上映会を開催するなど、現在にいたっています。

日本ミャンマー友好協会でのミャンマー映画鑑賞会を始めるにあたって、私はミャンマーと日本のかけはしの一助になりたいといつも思い続けていました。このたびそれが実現するにいたって、大変うれしく思っています。日本ミャンマー友好協会の中に文化交流部会が設置され、その責任者として私が就任することになりました。

2023年3月25日市ヶ谷のJICA地球ひろば国際会議室で行われた、ミャンマー映画鑑賞会は一般の方々も大勢来ていただきありがとうございます。感謝に堪えません。そしてアンケートにもお答えいただき、御礼申し上げます。アンケートの結果をご報告致しますと、上映した作品「小さな村の新任教師Tomorrow」の感想は、感動した、大変良かったなど、約8割の鑑賞者の意見がありました。まだまだ鑑賞者の人数こそ少ないのですが、日本人が観ても鑑賞に堪えるミャンマー映画がここにあるんだということが言えると思います。

じつは「小さな村の新任教師Tomorrow」を2015年ミャンマー映画祭の4回目、渋谷で公開したとき、この映画を製作したプロデューサーと主演俳優、監督を日本に招待して、映画の上映後、舞台挨拶をして頂き、その時にいろいろな話を聞くことが出来ました。

製作時の裏話などを聞く機会があり、この映画はコミックが原作であると知らされました。それはちょっとした驚きでした。まさかコミックにこのドラマが描かれていたとは思ってもよらなかったのです。主演俳優の教師役をつとめたナウンナウンさんはプロデューサーのゾーミョウさんの息子さんでした。家族で映画を撮られていたんですね。どうりで息もあっていると思いました。

私がミャンマー映画祭を開催するにあたって、ミャンマーの映画を管轄する、ミャンマー情報省はいくつも私に映画を見せてくれます。しかし私は情報省が推薦する映画は断ることが多いのです。それは日本人から観て面白いかどうか疑問に思える映画ばかりだからです。ミャンマーでは年間(2007年当時)900本の映画を作っているという事実があります。私は自分で観て納得のいく映画しか日本で公開したくありません。ミャンマー情報省には日本での上映を許可しない作品もあり、その理由は分かりませんが、とにかく上映許可を交渉するだけでも簡単だったり、難しかったり作品ごとにいろいろな複雑な要素があるのですが、日本とミャンマーの友好のためには、今後もミャンマー映画祭を続けていかなければならないと思っています。





楽しかったさくらんぼ狩りへのバスツアー

人材交流：日緬青年交流会

梅雨晴れの6月18日(日)、日本とミャンマーの青年10名が参加して、「さくらんぼ狩りバスツアー」の日緬青年交流会を楽しみました。

今回は、山梨県の5つの名所を巡る日帰りツアーでした。日本とミャンマーの青年が交流できるように、主催者が参加者の往路と復路のバス座席を予め組み合わせて指定しました。また、5箇所の名所を回る間の座席は自由としました。これによって、日本とミャンマーの青年がバスの中で隣り合わせて交流できるようにしました。

「猿橋」の景観

最初に「猿橋」の景観と紫陽花の花を観賞しました。ここは1426年(応永33年)武田信長と足利持氏、1524年(大永4年)には、武田信虎と上杉憲房とが合戦した場所で、戦略上の要所でした。



「浅間神社」へのお参り

次に、甲斐国一宮神社として有名な浅間神社を訪問。たくさんの祈願とお礼のお札を見ました。

その中に、「3億円が当たりました。有難うございました」というのがありました。これを見た参加者は、「私も次のサマージャンボで3億円当たりたい!」と願う人がいました。

石和温泉駅でのランチ

午後1時ごろに、石和温泉駅に到着。「ランチを自由に取ってください」とのご案内にしたがって、周辺の食堂を訪ねたところ、すべて「10人様はお断り!」とのこと。何でも、シェフが一人しかいないので、10人分を一人で作ると50分かかる、というのが理由でした。やむなく、セブンイレブンのコンビニを見つけて、「コンビニ弁当等」を夫々買って、駅前のバス乗りのベンチに座って食べました。このバスツアーで唯一の「不満足」でありましたが、参加者によっては、「これが一番栄養バランスがとれて嬉しい!」との意見もありました。



「さくらんぼ狩り」

ランチの後は、待ちに待ったさくらんぼ狩り。場所は勝沼ブドウ畑の高台のさくらんぼ畑です。オーナーの青年から、いくつかの注意事項を聞いた後、すぐに「さくらんぼ狩り」に臨みました。要は「30分間に、いくつ食べても良いが、一個でも持ち帰っていることが発覚すれば、高いお金を払ってもらう」とのこと。各自、小さなビニール袋をもらい、食べたらこれに種をいれるべし、とのこと。さくらんぼの木々は、2~4m程度の低木。4種類のさくらんぼが植えてあるとのことだが、知っているのは「佐藤錦」くらい。次々にちぎっては食べ、ちぎっては食べ…30分は瞬間に過ぎ、お



腹はさくらんぼで一杯。満腹、満腹! Enough, enough!の連発でした。

シャトー勝沼でのワイン試飲

最後に「シャトー勝沼」のお店で出来立てワインの試飲会。甘い、辛い、そして、さくらんぼワイン等。カップに注いでは、グイ、注いではグイ…

これで、すべての訪問を完了し家路に着



きました。ところが、中央道が酷い渋滞。午後5時に出発したのに、新宿着は9時少し前。4時間の乗車はちょっと退屈しましたが、若い人達はバスで熟睡し、元気いっぱいでした。

1週間前に夫と合流するために日本に来ました。このツアーが初めての外出で、とても気分が晴れました。今日、訪問した中では、さくらんぼ狩りが一番面白くて楽しかったわ。おなか一杯さくらんぼを食べたので、しばらくは、食べなくても結構よ日本語をもっと、勉強しなくちゃ!

(ミャンマー女性)

今回の日帰りバスツアーも参加した皆さんにとっても好評でした。(藤村記)



ミャンマーエンジニアとしての来日

株式会社 富士ピー・エス
関西支店工務部工事チーム アウンゾウテ

1.自己紹介

私の名前はアウンゾウテ [AUNG ZAW HTET] です。年齢は31歳です。日本に2014年(9年前)に来ました。出身地はヤンゴンですが、親の仕事がメイティラーにあるため子供の時から大学を卒業するまで住んでいました。大学はメイティラー工科大学 (Technological University Meiktila)、学科はシビルエンジニアリング (Civil Engineering) を専攻しました。現在、日本語能力検定N2を保有しています。



写真1 筆者 (あやとりはしにて)

2.日本企業への就職活動

大学の卒業試験が終わった頃ヤンゴンに行って就職するため必要な知識を勉強しました。MES-Myanmar Engineering Societies の色々なコースを受講しに行きました。その掲示板に今の会社 (富士ピー・エス FUJI PS) のリクルートの紙が貼ってありました。卒業試験も終わり卒業見込みも出てきたのでリクルートを頑張ってみようと思いました。その時は日本に行くことは夢にも思っていなかったです。当時は日本へ行く人も少なく日本での就職自体も困難でした。直接日本の会社に入ることは滅多になかったからです。リクルート内容は透明感もあり、勤務内容や給料等がはっきり記載されていました。日本で働けるなら自分の人生も大きく変わることを想像し、さらに、幼少期からの夢だったエンジニアとして活躍できる日本の橋梁を作る技術に興味があったので入社試験を受験しました。学科試験に合格後、面接が行われ当日に結果が発表されて4名が選ばれました。その時に日本に行く日にちも決まり日本語の勉強をしました。勉強期間が2ヶ月しかないため日々日本語を

しっかり勉強しました。日本に行く日までは「ひらがなとカタカナ」だけ読めるようになりました。2014年2月末、日本に到着し入社 (入社式は後日) しました。会社側も日本語がまだ分からない私達を日本語教室に通わせてくれました。昼間は会社のこと、夜は日本語教室に通い日々を過ごしました。同年4月1日に日本で入社式 (日本人と一緒に) が行われ本格的に社会人の一人となりました。

3.業務内容

入社してOJT (On the Job Training) から始まり今まで橋梁の現場勤務に就いています。現場経験も9年間になりました。OJTから始まり、最初の現場に現場着工から完工まで居ました。ミャンマーでも現場経験が無く、日本語もあまり出来てない私は日々、大変な苦勞を感じていました。日本語はひらがな・カタカナ・標準語以外にも方言で話すこともありますので話す事より聞く事も難しかったです。それで仕事の終わったあとに毎晩テレビ見て日本語の勉強を行いました。3~4ヶ月経ってちよつとずつ分かってくるようになり、会話も出来るようになりました。現場経験ですが主に高速道路橋 (PC上部工) を造る仕事です。高速道路の本体を作るPC上部工とは、橋脚上に橋桁を架設または場所打ち製作して緊張材(PC鋼材) を緊張し、橋面上に壁高欄やアスファルト舗装を施工して、車の走行に必要なPC橋を造ることです。業務内容は橋を作る前に現地確認・計画



あやとり橋



陽梅山高架橋



写真 4 スパンバイスパン工法

感じる点は今でもありますが、周囲の同僚や先輩と支え合って成長していきたいと思います。



写真 2 エクストラロード橋

書の作成、準備工、資材の注文、それから測量、書類作成、施工管理、施工ステップ毎に立会（役所対応）等です。私が従事した現場を写真2, 3, 4に示します。

4.日本で苦勞した点

外国人の一人として日本の仕事で苦勞した点が色々ありました。それは言葉の違いもあり言われたことは分かるのですがコミュニケーションが難しく言いたいことをしっかりと伝えるに苦労しました。日本人の先輩に相談したところ、言いたいことも大事ですが言い方も大事なことを認識させられました。そのことによって、悩んだときは一人で抱えこまず誰かに相談しようと考えられるようになりました。日本語の言い回しやニュアンスなど難しいと

5.おわりに

日本の仕事は「雇用が安定している」、「やりたい仕事ができる」、「やりがいを感じる」、「給与水準が高い」のは間違いないですが、個人的には日本の技術を学びながら、もの造りが楽しく出来るのが一番良かった事です。もう一つは、来日から会った日本人のやさしさ、支えてくれたことも感謝しています。日本人は仕事にまじめな人が多くてやることも終わるまでしっかりするのが当たり前で思っているその気持ちを尊敬します。自分もそういう事を心に入れて日々仕事をしています。来年は仕事に必要な資格試験（一級土木施工管理技士試験、日本語能力試験N1）を取得できるように頑張りたいと思います。



写真 3 張り出し架設工法



菰野第2高架橋



【さて、どうなることやら 奮戦記】

30年前のヤンゴンと

今のネピドーの類似と相違

当協会会員 倭 昌輝



一年ぶりの投稿なので、少し自己紹介しますと、商社の駐在員として1987～91、95～98、2004～5の3度ヤンゴンに、2012～15年にはネピドーに勤務しました。その中で、最も不便で辛いことも多かった筈の、最初の駐在時の1990年前後のことが、一番懐かしく、楽しく思い出されるので、前回まで、次のようなことを色々とお話してきました。

- ①当時はビール生産力（国営老朽工場のみ）が極めて僅かで、タイから闇輸入されたビールを1缶約1,000円で買って、気合を入れて大事に飲んでいました。
- ②ゴルフボールが極めて貴重。池に入れたボールを、キャディーの子供が、池に飛び込んで取ってきてくれた。
- ③彼等はまた、藪に入ったボールを見つけながら気付かぬ振りをして、

足でフェアウェー近くまで運んでくれた。

- ④国際電話回線が僅か28本で一時間以上待ち。恐らく国際電話は全て盗聴されていた。
- ⑤パガン観光はガイドブック皆無。ガイドもおらず全く舗装されない道路で砂まみれ。
- ⑥ヤンゴン動物園は象やラクダに触れるし、猛獣の檻も薄い網一枚で握手も可能。
- ⑦当時のヤンゴンでは男女二人でのデートは決して親に許されず。グループ交際で、互いを見つめ合っただけで気持ちを示しあい、動物園の奥の林の中で逢引き。
- ⑧停電が多くて、48時間連続もあった。
- ⑨私の乗っていた車の運転手さんがスピード違反で捕まったが、お巡りさんより遥かに年上だったので、「気を付けて下さいね」だけで済んでしまった（ミャンマーの旺盛な敬老精神を痛感）等々。

さて今回は、編集部からのご指示に沿って、最初の駐在時1990年前後のヤンゴンと、最近のネピドーの比較、という視点から申述べます。

私が、喧噪のヤンゴン経由でネピドーに着任したのは、2012年の8月でして、最初のヤンゴン駐在の終了時から29年が経過していたのですが、空港を出て最初に、「懐かしい雰囲気だなあ。やっとこのノンビリした世界に帰ってこられたなあ」と幸せに感

じました。

1990年前後、ヤンゴン空港からダウンタウンのスーレパゴダ前まで、車で30分あれば十分で、道路混雑は皆無。必要道路沿いには建物があるとはいえ、ダウンタウンに入る直前まで人通りは少なく、一方大木や林が多くて、実にのんびりした雰囲気でした。その当時のことを思い出したのです。

1990年前後のヤンゴン在留邦人は、子供も含めて多分100人くらいで、大抵の方々と顔見知り。日本人会忘年会は、いわば日本の職場での忘年会と大差無い、和気藹々とした雰囲気。2回目・3回目のヤンゴン駐在時は在留邦人も数百人となり、昔を知る私にとっては逆に寂しくも感じたのですが。一方、ネピドー在住日本人は、私の着任時で、私を含めて僅か二人。少しずつ増えて、2015年の帰国時には40人くらいになっていましたが、正に、あの懐かしの1990年代ヤンゴンの、邦人同士の助け合い・励まし合い世界の再来です。

ゴルフ場が、土日に予約無しで行ってもすぐにスタートできる点、昔のヤンゴンと今のネピドーが同じです。夜空の星の美しさも、早朝の散歩の涼しさ・静けさ・空気の美味しさも同じです。

和食を食べられるお店は最初全く無くて、ネピドー駐在2年目にやっと一軒できました。その点は1990年のヤンゴンと良い勝負でしたが、もちろ

ん生活物資全般の入手は、ずっと楽です。ビールも日本より安い値段で買えます。途中から、輸入物のウィスキーやワインの購入が難しくなってきましたが、私はミャンマー製でも、それなりに楽しく飲んでいました。

アベックは、今のヤンゴン同様、平気で仲良く歩いていますが、人口が少ない分、ヤンゴンほどは目立ちません。歴史の浅い都市なので、シュウェダゴンパゴダのようなデートスポットも、娯楽施設も少ないのが、かわいそうです。

一方、ネピドーは政府官庁が多いせいか、停電が少ないのが大きな利点です。内陸なので、ヤンゴンよりも平均気温は高いですが、緑が多く、広々として風もあるのが、全体としてヤンゴンよりは過ごし易いです。

さて、1990年代前後のヤンゴンでも2012~15のネピドーでも、私が最も頻繁に訪ねた客先はミャンマー国鉄でした。昔ヤンゴンの赤レンガの国鉄本社やインセインの工場を、ロンジーとタイボンでウロチョロしていた頃、ヤンゴン工科大学を卒業して国鉄に入社した人達が、大幹部となっており、ネピドーに移った国鉄を訪ねると、向こうも大抵が私の顔を覚えてくれていたことを、本当に嬉しく思いました。



コロナやクーデターのこともあり、最後にミャンマーに行ってから3年半が経過しました。とにかく平和が戻って、旧友達が安全・健康で、私自身も地方も含めてのんびり旅行できる日が来ることを、心から願っています。

米村前会長お別れの会開催



米村前会長とお別れ

令和5年6月、昨年末大動脈解離のため急逝された米村前会長お別れの会が、新宿のさる会館で挙行された。米村夫人など協会関係者約30人が参集した。

藤村会長代行の挨拶のあと、故人を偲んで業績の紹介、写真やビデオの映写、来賓としてソーハン大使閣下のことば、続いて協会都築専務、フクダ&パートナー社林亮一専務、(一社)日本森林再生機構小川勝行代表理事から故人の思い出話し等があり、米村 緑夫人から感謝のことばがあった。続いて、縁で結ばれた者たちが集まり、和やかな懇親会が行われた。



米村 緑夫人



藤村会長代行のお別れの言葉



懇親会での献杯



ミャンマー国有鉄道OB会に参加して

当協会副会長 高松重信

私とミャンマー連邦共和国との親交は今年で41年になります。考えてみれば、人生の半生期間にも及び、誠に不思議な御縁で結ばれているように思います。この様な中で今回、ミャンマー国鉄(MR)OB会の教え子である幹事殿から同国鉄OB会への御招待を受け楽しみにしていました。

今回のMR・OB会の招待は1982年来からのMRに対する貢献と、MR総裁のたつての要請により2003年ボランティア活動で鉄道学校開設し、御教えした生徒諸君及びその後の教え子達による強いOB会への参加要請などからOB会の役員が判断され、その結果の招待でありました、外国人である私への招待は異例中の異例ということになった次第です。

2023年3月11日朝7:20ころ、元MR副総裁の方がトヨタの自家用車を運転しホテルへ迎えにきて頂きました。早速二人でヤンゴン市にある会場のMorning Star Caféレストランに

到着すると懐かしい多くの面々がおられるのではないかと。最近お会いした方から数十年前にお会いした方々まで誠に懐かしい顔に接しました。

ミャンマー国鉄の歴史は古く創立は1877年(明治10年)であり、今年で146年になります。現在では営業距離は約6000キロを有しており、日本製の機関車と気動車も稼働しています。特にその気動車は全国で運行されミャンマーの人々の足として大変に重宝されています。

MRの車両は機関車(DELとDHL)、気動車、客車と貨車であり、4つのメンテナンス工場と多くの区所で検修が行われており、戦時中、日本国鉄の職員もおられました。この他、機関車(主にDEL)製造工場と客車・貨車製造工場も持っています。この製造工場新設のさい、嘗て鉄道運輸大臣からレビューを頼まれ、私見を提案させて頂いたこともありました。

現在MRはミャンマーの運輸通信省

(MOTC)の一つの重要な機関として存在していますから、このOB会【Myanmar Railway Gathering】には、退職された大臣、副大臣及び省の局長及びMR(国鉄)の総裁、局長からフォーマンまで多彩な方々が参加されますが、時には現役の方も参加されています。

自動車から降りて早速会場に入ると、昔の面影を抱いた友人や教え子の方々がいっぱいおられ、懐かしさで胸が熱くなりました。相手の方も私と気付き多くの方が私の周りに来て下され、口々に元気ですかと声をかけて頂いた。

それら何れの人達ともMRの再生と発展に共に苦勞したので、昔のことが頭をよぎりました。面影や話しぶりは昔と変わっていなかったが、頭髪が白く、些か少なくなっている諸兄弟が殆どであった。

幹事により不肖私が約90名全員に紹介され、一応挨拶をさせて頂いたあと正面の席を用意され、会が始まりました。



集合記念写真(元副大臣、局長からフォーマンまで)



左から高松(筆者)、日本で研修を受けた元MR計画局長(女性)、元土木局長

最近の事情によりアルコール類は控えているとのことで、コーヒーなどの飲み物とミャンマーの国民食「モヒンガー」と「チャパティ」でありました。

宴席もたけなわになってきました。MRは階級制が厳しいから上司は絶対的ですが、このOB会は無礼講で元副大臣、局長（女性含む）からフォーマンまで同士の如く、ワイワイがやがやになって大いに賑わいました。

私の周りにも輪ができました。その後、あちらこちらに出来ている輪へ梯子を致しました。何処の国も同じく、鉄道員はやはり、鉄道の話に花が咲きます。

「あの酒の強い日本人は今どうしているか」

「あの優しく親切な日本人は元気か」
「日本で学んだことが大変に役にたった」

「今から約40年前チャンギン・セメント工場の南方 8.4km にある石灰石鉱山から同工場への原料（石灰石）輸送と製品（セメント）を工場からイラワジ河岸にある出荷港まで 10km を輸送する鉄道電化工事に、日本の人達と苦労して完成させた」

※現在に至っても同工場内では日本の電気機関車が貨車を牽引して活躍しています。

「昔、日本での研修時に給与されたお金を始末し貯金したいために、インスタント・ラーメンを毎日食べた」と言う局長。

「ミャンマーは厳しい状況であるが、日本は今後も支援してくれるのか。隣の大国には世話になりたくない」

また、多くの教え子からも感謝を述べられたのは大変に嬉しく思いました。冗談も飛び交い、荒くれ者のフォーマンのボス的な教え子は今も健在で、元局長を尻目に、私に困ったおりは俺に話してくれと言ったので、お前は奥さんに頭があがらないと言っていたが、今はどうだという！教え子達は、無理、無理!!と言って本人も元局長も皆で大笑いになりました。

お互い元鉄道員同士でありますから、国籍を離れ、肝胆相照らす話合いとなりました。朝8:00より開始され、約2時間の誠に楽しい一時を過ごさせて頂きました。

ミャンマー国鉄は一昨年 of 政変で内部的にも意見相違などがあって混

乱を来したが、ようやく立ち直り再建の緒に就いている。振り返ってみれば、英国の植民地時代に創立されたが、その政策に翻弄されながら、独立の息吹を背負い、戦時中を乗り切り、1948年1月4日の独立以来の政変・紛争などの風雪にも耐え凌ぎ今日に至っています。

翻ってみれば、我々旧日本国有鉄道も同じように団結力の強い集団でもありました。

【轟け鉄輪、我が此の精神、輝く使命は儼たり、響けり・・・】私は何故か、作詞：北原白秋、作曲：山田耕筰であるこの「鉄道精神の歌」が頭をよぎりました。

詳細は省略しますが、只今現在に於いても、ミャンマー連邦共和国の大動脈である鉄道の整備・拡充・近代化にJNR、JRのOB方々などと日本の方々が、ミャンマーの人々のために炎天下を問わず日夜、ミャンマーの人々と共に建設に励んでおられることを付記致します。



左から順にMR元局長、その妻（元大学教授）、運輸通信省の元顧問（女性）、高松（筆者）、MR元局長



交流の皆様



<活躍する在日ミャンマー人のご紹介> NO.1

日本での体験を生かし、日緬の架け橋になりたい

筆者：宮本ナンシャエーイン（滋賀県野洲市在住）



2020年2月、第16回外国人による日本語スピーチコンテストに選抜され出場。

私はシャン族の宮本ナンシャエーインと申します。1982年9月にシャン州のラーショーに生まれました。シャン州はミャンマーの中東部に位置する州です。人口は470万人超で面積は約156,000km²です。州都はタウンジーで、シャン高原ではルビーやサファイアなどの宝石類が沢山採れます。

私はマンダレーのヤダナポン大学経済学部を卒業し、卒業後は母の八百屋を手伝っていましたが、23歳の時ヤンゴンで洋服店を営む友人を頼り一人で移住しました。ヤンゴンでは友人の洋服店を手伝いながら、近くのお寺で日本語の勉強に励みました。2008年、私が26歳の時、観光でたまたまヤンゴンを訪れていた現在の夫とそのお寺で出会い、その年にヤンゴンで結婚しました。2009年3月に日本

にやってきて、京都府長岡京市に新居を構え日本での生活がスタートしました。その後、夫の転勤で各地を回りましたが、現在は滋賀県野洲市で二人の子供（10歳と7歳の息子）にも恵まれ忙しい毎日を送っています。

今年（2023年）で来日14年目となりますが、最初は見るもの聞くもの全くミャンマーと違い、大変戸惑った事が思い出されます。

ここで少し私の野洲市でのキャリアをご紹介しますと思います。野洲市の国際協会さんには大変お世話になり、日本人の方を対象にミャンマー語教室を開いたり、また、短期講師として近くの幼稚園や小学校でミャンマーの歴史や文化、言葉等を教え、日緬の交流に励みました。

そして、2020年2月には国際協会さんのバックアップで、外国人による日本語スピーチコンテストにも出場でき、大変貴重な体験をさせていただきました。最近はYouTubeのチャンネルネーム（Nan Chan's Kitchen）を登録し、在日ミャンマー人や日本人を対象に、日本の食材を使ったミャンマー料理の紹介や、FacebookのPageで「Nan Chan's Kitchen」から在日ミ

ャンマー人に対し、日本の観光地や日本料理とミャンマー料理の紹介、子育てや身の上相談など、多方面に情報発信を行っています。皆様も是非一度、YouTubeやFacebookにお立ち寄りいただければ嬉しいです。

また、近年、自宅近くに畑を借りてミャンマー野菜や果物の栽培や販売を行っております。日本ではなかなか手に入りにくい食材だけに、ミャンマー人や日本人の方から重宝されており、私としましても大変遣り甲斐を感じております。

2022年10月には野洲市以外で、（公財）近江八幡市国際協会と（一社）日本ミャンマー友好協会の共催による「多文化まるごと講座・ミャンマー編」の講師に招かれ、日本人の皆様とミャンマー料理を通じ交流をさせていただきました。また、2023年には（一社）日本ミャンマー友好協会に入会し、今後は滋賀県以外の方々とも広く交流できることを楽しみにしております。これからは、もっと日本の文化や歴史、習慣などを学び、その経験を生かして在日ミャンマー人や日本人の皆さんが両国の理解を深められるよう架け橋になりたいと願っております。



短期講師として、野洲市の幼稚園や小学校でミャンマーの歴史や文化、言葉を教える宮本さん。



畑を借りて、早朝から頑張ってミャンマーの野菜や果物を育てています。



2022年10月、「多文化まるごと講座・ミャンマー編」で講師を務めた宮本さん(右)



千野皓司元会長ご逝去

専務理事 都築 治

映画監督で当協会の会長を長く務められた千野皓司氏が、昨年暮12月8日老衰のため亡くなりました。享年91歳、17日で92歳になられたところでした。千野監督の代表作は日緬合作映画「血の絆で、2000年代初頭ミャンマー渡航が簡単でない時期、約15年掛かって同作品は完成しました。

池田正隆氏、田崎央氏に続いて、2007年当協会の代表に就任されました。旧軍人会員の高齢化にともなう会員減少と、ミャンマーバッシングが続く時代背景により、千野会長は協

会運営に大変苦勞され、最後は、2015年矢が尽きた感じで会長の座を退くこととなりました。この間当協会は混乱が続き、分裂騒ぎが起きました。

私の千野さんとの最大の思い出は、2013年1月30日ネーピードーの国会議事堂の大会場での「血の絆」



上映です。各大臣、国会議員、政府関係者等約600人が鑑賞され、終了後はバンケットルームで盛大に晩餐会が催されました。ミャンマーの国会議事堂内で、日本が関わるこのようなイベント開催は二度と不可能でしょう。



<哀悼> 松尾理事ご逝去

当協会理事・関西支部事務局長 岡 晃市

ミャンマーを愛し続けた当協会理事・松尾義久氏が廃用症候群のため、2023年2月3日、享年86歳にてご逝去されました。それまでは大変お元気で当協会の会報編集長として精力的に編集業務をこなされ、また、関西支部長としても協会の発展にご尽力されました。2022年秋頃から突然体調不良を訴えられ、転院しながら治療に専念されましたが、努力の甲斐もなく悲しい結果となってしまいました。訃報に接した私は言葉も無く暫くは茫然とし、在りし日の松尾氏との思い出が走馬灯のように頭を過りました。

松尾氏は京大名誉教授・松尾義海氏の長男として1936年長崎県でお生まれになり、1961年に立命館大

学を卒業されました。卒業後、京都の日立ツール(株)に入社。1996年同社を定年退職後、ミャンマーを訪問、ウ・ヴェップーラ大長老のもとで出家、マハシ瞑想寺院にて1年間修行。帰国後は仏教講演活動や日本工具工業会の会報編集主幹、更に「機械工具百年史」の編集責任者を務められました。2000年頃当協会に入会。その後はミャンマーとの太い人脈とキャリアを生かし、当協会の発展に多大なる貢献をいただきました。特に2015年から会報の編集長とし

て辣腕を振るう傍ら、協会の財政難により会報発行中止に瀕した時、多額の自費を提供し危機を切り抜けたと聞き及んでおります。心身ともに「ビルメロ」だった松尾氏に感謝し、心からご冥福をお祈り申し上げます。



前列左から二人目が松尾氏。1997年1月、ミャンマーの首都ヤンゴンのマハシ瞑想寺院にて。世界各地から来ている修行僧と。



<特別寄稿>

お釈迦さまの物語 (第八講)

講師: つづきおさむ

15 ヤサのさとり

ブッダは5人の修行者に二つの極端をはなれた「中道」の教えを説き、続いてやすらぎの境地に達する「八つの正しい道」、「四つの真理」について説きました。二つの極端とは歓楽の生活におぼれること、自分で自分を苦しめる苦行に努めることを言います。コンダンニャ以下5人は順次教化され、ついにブッダと同じ最高レベルの、まよいのないやすらぎの境地に達しました。

そのころバーラーナシーに、大金持ちの息子ヤサと言う若ものがいました。当時バーラーナシーは大いに栄え、ヤサも王さまに劣らぬほどのぜいたくな生活をしていました。かれは、季節ごとに宮殿のような三つのやかたで過ごしていました。冷季用、暑季用、雨季用のやかたです。身の回りを世話する多くの若くて美しい女性にかしずかれ、人もうらやむ暮らしをしていたヤサですが、ある夜、遊びつかれて早く寝てしまい、かの女たちよりも早く目が覚めました。

かれは、眠っている女たちを見ました。ある者は髪を乱し、ある者はよだれを流し、ある者は歯ぎしりをし、ある者は大きな寝ごとを言い、目の前に死体の捨て場を見るような思いがしました。大変いやな気持ちになりました。

「ああ、嫌だ。ああ、わずらわしい。」

ヤサはそのまま家を出て、城門からぬけ出しました。ふらふらと、修行者が集まる鹿野園に来てしまいました。



そのとき、ブッダは明けがたのそぞろ歩きをしていました。ブッダはヤサが遠くから来るのが見えたので、座って待ちました。ぶつぶつ言いながらヤサが通りかかると、言葉をかけました。

「ヤサ、ここには嫌なことはない。ここにはわずらわしいことはない。ここに来て座りなさい。教えを説いてやろう。」

ヤサは、はっとして正気にもどり、ブッダのかたわらに座りました。ブッダは聞き手に応じて、しだいに高度なレベルに達する話しをしました。すなわち「施し」の話し、「いましめ」の話し、「天界」の話しです。続いて、感覚的な欲望が身を滅ぼし、財を失わせ、むなしさが残る等の話しをしました。

ブッダは、ヤサがすなおな心、やわらかな心、よろこびの心、すんだ心になったことを知ると、「四つの真理」を説き明かしました。清らかで、よごれのない布があざやかに染め上がるように、ヤサには、ほこりのない、よごれのない真理を見る目が生じました。

朝になって、ヤサの両親はむすこがないのに気づきました。四方を手分けしてさがし、父親は鹿野園まで来ました。そこでブッダはヤサをかくし、父親にヤサに話したように教えを説きました。かれもまた説法を聞いて、よごれのない真理を見る目が生じました。ブッダがヤサの父親のために教えを説いているうちに、ヤサは執着心がなくなり、やすらぎの境地に達しました。ヤサは父親の前に姿をあらわしました。



16 教団の成立

ブッダは、ヤサがもはや在俗生活に戻れない状態にあることを知り、そこで、言葉を発しました。

「来たれ、修行僧よ。法はよく説かれた。まよいの世界からはなれるため、清らかな修行を行え。」

これがヤサの受戒でした。ヤサは仏法教団に入った最初の人となりました。このとき、この世で尊敬さるべき人、やすらぎの境地に達した人は七人になりました。また資産家の、ヤサの父親は「仏、法、僧侶たちの集団」の三宝に帰依することになった、世で最初の在俗の信者でした。

早朝、ブッダはつきそいの僧侶としてヤサらをとめない、かれの実家におもむき食事の布施を受けました。ブッダはヤサの母親や妻にも説いて、教化しました。二人はヤサの父親と同じように真理を見る目が生じ、「仏・法・僧侶たちの集団」に帰依しました。かの女たちは最初の女性在俗信者になりました。



ヤサには、資産家の四人の友人がいました。かれらはヤサが髪とひげをそって坊さんになったことを知りました。[きっとそれは変な、いいかげんな教えではないだろう。あのヤサが髪とひげをそって坊さんになったほどだから]。かれら四人はヤサのところに出かけ、ヤサは四人をブッダのところ带到了。ブッダは先に教化したように、四人に教えを順次説きました。かれらもまた真理を見る目が生じ、ヤサと同じく受戒しました。これでこの世でやすらぎの境地に達した人は十一人となりました。

ヤサにはさらに五十人ほどの友人がありました。かれらもまた、良家の子息でした。ヤサはかれらをブッダのところにつれて行きました。五十人もほどなく受戒することになり、かくて、この世でやすらぎの境地に達した教団の僧は、六十一人を数える規模になりました。

ブッダは最高の境地に達した六十人の僧に、つぎのように言いました。

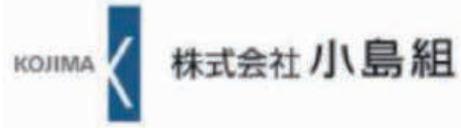
「わたしもおまえたちも、一切のとらわれから脱してやすらぎの境地に達した。各地にとび、教えを説きなさい。多くの人びとの利益のために、多くの人びとの安楽のために、世人にたいするあわれみのために、神々と人間たちの利益・安楽のために。一つの道を二人で行ってはならない。初めもよく、中ごろもよく、終わりもよく、意味もよくそなわり、文句もよくそなわった教えを説きなさい……………」



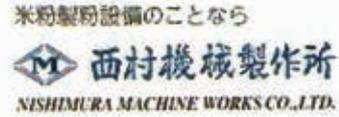
一同は四方に散って行きました。ブッダ自身は、かつて修行したウルヴェーラーに向いました。途中、ある密林に入って樹の下で静かに座っていました。そこへ、持ちものを盗んで逃げた遊女をさがして、三十人の名門の若ものがやって来ました。この青年たちに、一人の遊女をさがすのと真実の自己をさがすのとどちらが大切かと問い、彼らを教化し、真理を見る目を生じさせました。

(筆者は当協会専務理事：都築治)

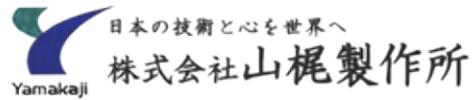
イラスト：とみざわ えりこ



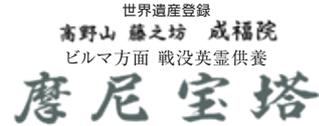
M3L Myanmar 3L Co., Ltd



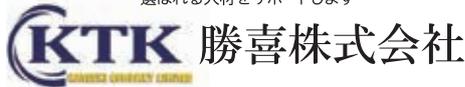
株式会社 ブヨウ



- ・お地蔵さんの寺
- ・壬生狂言
- ・新選組ゆかりの寺



選ばれる人材をサポートします



ミャンマーにおける政治的混乱は未だ解決の目途がないままになっています。このため、海外の大学に留学するか企業に勤務することを希望する若者が増大しています。しかしながら、ミャンマーにいる家族が、混乱の影響を受けたために、送金が途絶えて困窮している在日留学生も増えています。ミャンマーの未来を担う青年達の希望を支えるための精神的、経済的な支援が必要とされています。

本号では日本とミャンマーの若者たちが交流する「さくらんぼ狩りバスツアー」の様子や、エンジニアの就職活動、料理研究家のミャンマー料理講座についても取り上げました。ミャンマー青年達が日本企業への就職を目指す挑戦と成長の過程にたいへん感銘を受けました。異なる文化や背景を持つ若者たちが、互いを理解する様々な交流活動が、非常に重要であることが理解されます。こうした交流活動の輪をさらに広げるためには、協会の理念に共感していただける仲間や会員の増強が欠かせません。共に力を合わせて協会の活動を前進させていきましょう。

【関西支部】〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田1丁目1-3大阪駅前第3ビル20F TEL.06-6342-1788

【三重支部】〒515-1411 三重県松阪市飯南町粥見2318-3中央土木(株)本社内 TEL.0598-32-8800

【ミャンマー支部】 No.37(1F), 164th Street, Tamwe Township, Yangon, Myanmar TEL.(+95) 9-505-1823